第 50 号　2024. 4

आयुस् あーゆす

〈発行〉　京都文教大学・京都文教短期大学図書館
京都府宇治市槙島町千足80

日本の現状と将来を考えるきっかけとなる良書を紹介します

前京都文教大学・京都文教短期大学図書館館長
総合社会学部・教授（植民地主義、帝国研究）　遠　藤　　央

水林　章 著『日本語に生まれること、フランス語に生きること：来たるべき市民の社会とその言語をめぐって』　春秋社　2023

３月いっぱいで図書館長を退くため、４年間書き続けてきた巻頭のエッセイもこれが最後である。今回は「母国に住みながら、苦労して習得した、そして今も日々習得しつつあるフランス語で著作を発表するという、考えてみれば相当におかしなこと、いや異常ともいえることに時間を費やすことになったのか」（序）という問いに光をあてる目的で書かれた本を紹介したい。日本社会の現在のあり方を痛烈に批判したものである。

「３　この国には『社会』がない」では「事の本質は、要するに、『時効によって消滅することのない自然的な諸権利』がこの国の人々の意識のいちばん深いところに届いていない、内面化されていない、自家薬籠中のものになっていないということに帰着するのではないか」という文章が冒頭におかれている。その「諸権利」とは何かを考える上で参照されるのがフランス人権宣言、とりわけ第1条および第２条なのである。「ここではあえてわたし自身の訳文を提示する」。以下の通りである。

第１条　人はみな自らの力（権利・権能）を他者に妨害されることなく自由に、そして等しく発揮できる存在として生まれ、生涯そのような存在であり続ける。市民のあいだにさまざまな社会的区別を設けることができるのは、それが社会のすべての構成員＝市民にとって有益である場合に限られる。

そして著者は「第１条が今日流布している訳文とは大いに違うこと、したがってその解釈も非常に異なることに気づかれたことであろう」と述べる。これは、きわめて重要なフランス語の解釈の問題なのである。詳しくは本文を参照してほしいが、「この国における『人権宣言』理解に対する根底的な疑問・批判である」と著者は述べている。

「結語　来たるべき社会の言語的基盤を求めて」は、日本の選挙に対する疑問からはじまる。そして、日本の有権者の大半は、（A）なにがあろうと特定の党にいれ続ける人、（B）政治は自分の知ったことではないと思い込んでいる人 、だと指摘する。「（A）と（B）は一見したところ対極的であるかに見えるが、実は両者はある一点において共通している。その一点とは公共＝パブリックの欠如である」。

「結語」の最後は言葉に関する文章である。「ボーヴォワールの言葉をもじれば、人は日本人に生まれるのではなく、日本人になる、いや日本語・日本文化によって日本人にさせられるというわけである」。最後の文章は「わたしは、これからも、日本語という牢獄のあり様を絶えず意識化するために、フランス語で/を生きること、書くことをやめないだろう。もちろん、フランス語ももう一つの別の牢獄であるということを忘れることなく、である」。これが本の題名の意味をよく物語っている。

日本語、自民党的なるもの、選挙、天皇制などについて興味深い論考がぎっしりと詰まっており、「来たるべき市民の社会と言語」を考える上できわめて示唆に富んでいる。ぜひ手にとってほしい本である。

（えんどう　ひさし）

本探訪記

総合社会学部　総合社会学科　観光・地域デザインコース2024年３月卒業　兼　房　愛　佳

川の流れは絶えることがない。それでいて、そこを流れる水は元々あった水ではない……と言った人が、かつて居た。海にたどり着いた水は雲になり、雨粒として降り落ち、また川に戻ってくる。物事はぐるぐると似たような動きで巡っているものだと私は思う。本もそうだ。いつか誰かが感じたことを、いまの誰かが共感したり、または考えたりする。読書は追体験であり、自身の新たな経験値だ。だから私は、本を読むのが好きだ。

本を多く読んでいると、まさに玉石混交であることがわかる。そこから玉と石塊を選り分けることで、己の好みに自覚的になっていく。出版されているものに貴賤はないが、好みの本と、好みでない本というものはどうしてもあるものだ。私の場合は、かなり広いストライクゾーンがあって、悲劇も喜劇も等しく楽しむことが出来る。基本的に長編小説を好むが、短編集も好きだ。詩集もたまには悪くない。好きな作家もいるし、あまり読むのが得意ではない作家もいる。本好きというのは、多分そういうものなのだと思う。好きな傾向はどうしてもあって、それに沿った物語を無意識のうちに望んでいる。

しかし、この世に自分の好みがすべて反映された物語は多くない。本を読みながら思ったことはないだろうか。あ、今このシーンで、この登場人物がその道を選ばなければ。こんなに頑張ってきたのに、まさかここでこのキャラクターが死ぬとは、などだ。いわゆる物語への無念である。登場人物が経験したことに共感できるのは、その物語がいかに巧みかを示している。悲しい思いをするのもまた一興だ。悲喜交々あわせて読書である。そもそも、そういう物を求めて、本を開くのだ。そのために本好きは図書館や、街の本屋を日々練り歩いているのである。水を求めてオアシスを探して歩く旅人のごとく、額に汗して本を見つける。しかし見つけた本が、思っていたものと違った。そういうこともある。それも含めて、本探しは楽しいものだ。だが、近年の私は本屋の中に違う動きがあるのを感じている。

なんだか、タイトルが長い。とある本のコーナーを見た私が最初に得た感想はそれであった。そう。タイトルが長いのだ。題名が本文の一部のごとく長い。紹介文の切り抜きかと思うほど長い。某銀行のCMか、はたまた歯切れの悪い政治家の答弁かというほど長い。手に取って軽く立ち読んでみると、確かにタイトルに違わぬストーリーだった。品質表示に偽りのない小説だ。こういうものもあるのか、と文字通り異世界でも覗いた気分だった。気になって探してみると、そういった類いの本は多く出回っているようだった。それどころか、小説のみならず、漫画やアニメなど様々な形で流布しているようだった。自分の好みを探していたら、流行の書籍に関してまさしく浦島太郎状態だ。私が新刊を待つうちに、三百年が経っていた。浦島太郎の無念をちょっと理解した。しかし私は幸運なことに、老いていない。さっそく新しいジャンルに足を踏み入れてみた。といっても、学生の金子は限られている。その小説などが掲載されている大手の小説掲載サイトのリンクを迷わずポチリと押した。

ちらほらと読んだ。面白いと思ったものもあり、そう好みでもないものもあった。しかし、タイトルの長さが私の道案内をしてくれていた。長いタイトルを初めて見たときは、なんて風情がないのだろうと思ったが、つまりタイトルの長さはいわゆる論文で言うところの「要旨」なのだ。卒業に際し論文を書いたから分かる。それさえ見れば、その物語の中身がおおまかに把握でき、より好みの本を容易に選別できる。これは画期的な発明だ。私たちはもう、水を求めて歩き回らなくても良いのだ。大きな標識が、この先に何があるかを知らせてくれている。舗装された道どころか、高速道路の開通とサービスエリアの整備、ついでにETC完備で料金も自動引き落としである。快適な本探しの時代の到来だ。日本の活気も倍増し、読後の無念とは完全におさらばだ。

と、喜ぶのもつかの間だった。少しすると、本を探したくなるのだ。それも、タイトルがたった二単語程度の分厚いハードカバーの本などを手に取りたくなる。いや、少し日に焼けた文庫本も捨てがたい。図書館に入り浸り、作者名の「あ」から順に眺めていく。これが楽しい。脳からアドレナリンやら何やらが出る。とても楽しい。なるほど、もはや習性として身についているのだろう。本好きはそのように進化、あるいは退化していくものなのかもしれない。勿論、全員がそうであるとは思わない。この世には様々な本好きがいる。しかし、少なくとも私は、砂の中からほんの一握りのものを掴みたいタイプのようだ。

タイトルが中身を説明してくれると、それは親切だしありがたい。だが、同時に初見の感動が薄れてしまう。安心感と引き換えに、ドキドキ感が減じてしまう。近年の時間効率重視のめまぐるしい社会には適応しているのだろうが、私は読書に効率を求めていない。だから、初見で長々とした題を見たときに言いようのない忌避感を覚えたのだ。一連の思考を経て、納得した。これを機に言語化できて良かったと思う。私はこれからも好みの本を求め歩き、たまには舗装された道を歩き、時には無念を味わいながらも、探索を続けていくことだろう。

学生生活の締めとしては、いささか堅さのない文章ではあるが、これを４年間の学びの結びとしたい。そして、この文章を目にした人が、少しでも本や図書館、文章を書くことに興味を持ってもらえたら、私にとってこれ以上ない幸いである。

（かねふさ　あいか）

知性の刃を研ぐ

臨床心理学部　臨床心理学科　子ども・青年心理コース２回生　**掛　川　陽　翔**

私たちは毎日、刻々と変化する日常に埋もれて、自分を見失って毎日を過ごしてしまうということが少なくない。しかし、それも無理はない。なぜなら、私たちは、自分たちでも驚愕するほど変化が急激で、そして激しい時代に生きているからだ。たった数年でスマートフォンが世界中に普及したり、たった１年で新型コロナウイルスが世界的に流行し、日本中の学校が休校になるなどといった混乱が起こることを、一体誰が想像しただろうか。そして、私たちはそうした不測の事態に直面すると、それを受け入れ、諦めと停滞の状態に慣れ、その事態をなすすべもなく受け入れて生きていかざるを得ないと考えてしまう傾向があるようだ。しかし、そのような予測不能な社会の運命に身を委ねる必要はない。なぜなら、私たち人間は、自分の行動を自分の意志で選択し、社会の運命に自ら影響を与える力を持っているからだ。変化が激しい時代に生きているからこそ、私たちにとって社会や時代の変化の影響を受けない普遍的な原則は、自分の人生の指針を考えるうえで大いなる助けになるに違いない。

では、その原則にはいったいどのようなものがあるのだろう。運動することや、人と良いコミュニケーションをとることの必要性など、時代の変化を問わず変えようのない人間社会の自然の法則はたくさんある。そのような原則のうちの一つを持つために、まず学生の皆さんに始めていただきたいことは、読書から日常生活に役立つ知識を吸収することを欠かさず行うことだ。本を買うなんてお金がもったいない！今はネットで情報が手に入るし、それでいいじゃないか！という声が聞こえてきそうである。しかし、ネットで情報を手に入れることと、本で情報を手に入れることには、とても重要な違いがある。それは、ネットは素早く情報を手に入れるために、次々と画面をスクロールしながら情報を取捨選択するのに対し、本は著者とじっくり対話するように向かい合うという違いだ。もちろん、ネットで次々に断片的で表面的な知識を寄せ集めたとしても、それが決して役に立たないというわけではない。むしろそのような断片的な方法論は、即効性が高く、一時的なその場しのぎのためにそれらの情報が大いに貢献してくれることもよくある。では、読書の場合はどうだろうか。読書の場合、ネットと違って、納得できない情報や難しい情報に出くわしたとしても、そう簡単に逃げ出すわけにはいかない。本を読むということは、お金を払ってその本の著者との対話を、何時間も辛抱強く続けることとちょうど同じといっていい。そうして苦労して著者と対話した時間は、短時間でネットの情報に触れた時間と違い、実際に対話した経験と同じように深く脳裏に刻み込まれ、いつまでたっても忘れない特別な経験となる。本は、たった数千円で日本中、世界中のあらゆる偉人と簡単に対話ができてしまうという、よく考えてみるとあまりにも恐ろしいツールなのだ。情報が体系的に説明された本を次々に読むことで、浅薄ですぐに忘れてしまうような個々の方法論ではなく、自分の血肉となり、素晴らしい人格の土台となるような、生命力にあふれた深いつながりのある知識が手に入る。そうして身に付けた体系的な知識は、応急処置にとどまらない長期的な成功をもたらすための、大切な土台となるに違いない。

『７つの習慣』『人を動かす』『嫌われる勇気』など、名著といわれる本はとてもたくさんある。そのような本の内容を学び実践できるようになってきたなと思った矢先、多くの現実をこれでもかと知り、まだまだ上のレベルがあるに違いないと知らされがっかりする…。僕の人生は、そんな終わりのない学びの冒険をひたすら毎日続けるということの繰り返しだ。しかしそれは、人間は生きている限り、永遠に成長し続けることができるという喜びにもとらえる事もできるのではないだろうか。そうした学びの冒険を少しでも多くの人に今日からでも楽しんでいただくために、自分の知性を職人が毎日丁寧に研ぐ刃物のように大切に扱う習慣をつけてほしい。そのために、まずは簡単な本でもいいので、自分が悩んでいることに関する本を、図書館に行って手に取ってみることだ。それが習慣になれば、読書をしないということがいかに恐ろしいことであるかということが分かる日が、きっと来るに違いない。

（かけがわ　ひなと）

✿✿✿ 私のすすめる３冊（私の推薦図書）✿✿✿

元幼児教育学科 教授（和歌文学、日本文学、国語教育）
千　古　利恵子

◎「原因」と「結果」の法則

ジェームズ・アレン（著）、坂本貢一（訳）／サンマーク出版　2003

イギリスの作家、ジェームス・アレン（1864生～1912没）執筆の本書は、自己啓発書の原典として評価され、聖書に次ぐベストセラーといわれている。「心は、創造の達人です。（中略）私たちは心の中で考えたとおりの人間になります。私たちを取りまく環境は、真の私たち自身を映し出す鏡にほかなりません。」と綴る彼の言葉が、生き辛さを感じる現代人にとっても救いになるからだろう。15歳の時に強盗に父を殺害され、多様な仕事をしながら独学で学び彼が書き残した言葉は、自己啓発書というより人生哲学書といえる。

◎「家族」はどこへいく

沢山実果子、岩上真珠、立山徳子、赤川学、岩本通弥（著）／青弓社　2007

本書は「都市空間の中の家族像」というテーマで開催された講師５人の講演記録である。「家族」という集合体を歴史の視点から解説し、現代社会の実情や地域と家族との関係など、今日的な問題を直視した内容である。少子・高齢化が加速する現代、家族が持っていた機能が失われ、「家族」に纏わる多様な問題が発生している。従来の「家族観」が揺らぎ始めているといえる今、個々人が「家族とは何か？」を問い直す時が来ているのだと、この１冊は警鐘を発しているようだ。

◎あたらしい教科書３　ことば

加賀野井秀一、酒井邦嘉、竹内敏晴、橋爪大三郎（監修）／プチグラパブリッシング　2006

小学校入学を皮切りに「教科書」を学び、知識を獲得し、学校教育を終えて、人は一人前の社会人になる。現在、社会人には「コミュニケーション力」が重要であるという考えが定着している。コミュニケーションは言語によるものと非言語によるものに二分されるが、人が他者と関わり「人」として生きるには「ことば」は必需品であるが、「ことば」についてどれ程知っているのだろう。現代思想、脳科学、社会学、演劇を専門にする４名の執筆者が、「ことばの習得」では無く「ことばについて考える」ことの重要性を問いかける１冊といえる。

（せんこ　りえこ）

✿✿✿　私のすすめる３冊（私の推薦図書）✿✿✿

元ライフデザイン総合学科　講師（調理学、応用栄養学）
岩　田　美智子

◎じんせいさいしょの

おおのたろう（著）／KADOKAWA　2023

昨年出産した娘が選んだ育児書の中の一つです。しかし、なんとすべて赤ちゃんのイラスト＊＊＊いまどきだなあ。

ゆびしゃぶりコレクションにヘアカタログ、ねぞうコレクションに泣きコレクション、０歳～１歳半までのあかちゃんのかわいすぎる仕草でどのページもいっぱいです。育児が楽しくて気楽になること請け合いです。誰もがきっと口角を上げて、目じりを下げて見てしまうと思います。

◎四畳半神話大系

森見登美彦（著）／角川文庫　2008

人生長く生きていると、それなりにたくさんの本を読んできたはずですが、時々ふわっと思い出す本はそんなに多くありませんよね。私の場合この本がそれです。

たまに過去を振り返って、あの時もう一つの道を選んでいたらよかったかなと考えたりする時、必ずこの本が頭に浮かびます。結局どの道を選んでも人生行きつくところは一緒なんだろなと変に納得させてくれるのです。

このはっきりしない紹介文を読んで、もやっとした方は是非一読してみてください。

◎すばらしい人体　あなたの体をめぐる知的冒険

山本健人（著）／ダイヤモンド社　2021

そういえば～へぇ～なるほど～っていう感覚好きですか？この本は、そんな知的好奇心を満足させてくれる１冊です。

どんな種類の新鮮な肉でもしっかり加熱して食べないと危険だよとか、有機物の塊である生きた人間の体がなぜ腐らないのかとか、医師の手術着や手袋が青い理由とかを、とっても面白く優しい文章で簡潔に教えてくれます。

これを読めば、ちこちゃんに「つまんねーやつだなー」と言わせられるんじゃないかな。

（いわた　みちこ）